Nov　2014　No. 43

大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

ウニの棘を含んだ赤土

数年前、最上部層の下部から、ウニの棘を大量に含んだ赤土が見つかりました。ウニの棘を大量に含む石灰岩が風化して棘の化石が表面に浮きだし、更にこれが流れ落ちて赤土と共に堆積し固まったものと思われます。この赤土を篩（ふるい）の上で水洗いすると、粘土が流れ落ちてウニの棘や「間歩帯」という棘のついていた板、そして小さなウミユリの骨片などが見つかりました。ウニの棘は細く、折れて１ｃｍ程度になっており、ほとんど同じ種類のものと思われます。この化石は風化が進んでおり保存状態はあまりよくありませんが、大量に見つかりましたので、ていねいに調べれば新たな発見があるかもしれません。

棘の基部と間歩帯　目盛５㎜

ウニの棘

金生山ではウミユリ化石ほどではありませんが、各部層からウニの化石が見つかっています。その多くは棘の一部で、太さや突起物の形状などから数種類に区別することができます。しかし、ウニの棘は部位によって形状が異なりますので、棘だけでは種の区分はできません。棘と比べると稀にしか見つかりませんが、関節の一部である突起がついた間歩帯も見つかっています。しかしこれらは、ほとんどがバラバラの状態で発見されており、多くの間歩帯が連なって体全体の形状が推測できるような姿の化石はまだ見つかっていません。このような状態ですから、金生山のウニ化石については、これまでに *Miocidaris spinulifera* と *Miocidaris platyacan* の２種が記載されているものの、詳細はま

だわかっていないのが現状です。

ウニ類は、ヒトデやウミユリなどと同じ棘皮動物のなかまです。このなかまは、体の基本的なかたちが五放射状（5 回転対称）であるというきわだった特徴を持っています。ヒトデは５本の腕をもっているので五放射状が分かりやすいのですが、ウニも棘を取り除くと、管足を出す歩帯という部分が放射状に５本ありますので、五放射状であることが分かります。ウニ類は約５億年前の古生代オルドビス紀の海に初めて出現しました。そして、２億５千万年前の古生代末期（ペルム紀末）に地球上の生物が大絶滅したとき、ウニ類も絶滅寸前まで追い込まれましたが、生き残った種が中生代になってふたたび繁栄しはじめ多くの種類が現れました。現在では世界中の海で、深海から浅海まで９００種以上のウニ類が生息しています。

私たちにとってウニは高級食材の一つです。塩ウニ、ウニ丼、寿司など、「ウニ大好き」という人も多いと思います。私たちが食用にしているウニは、バフンウニ、ムラサキウニ、エゾバフンウニ、キタムラサキウニなどで、沿岸部で漁獲される他、輸入、養殖も盛んに行われています。ウニの養殖で恐れられているのが「磯焼け」です。ウニは大量発生することがあり、これが磯焼けの原因の一つとなっています。ウニは海藻を食べますので、大量発生するとワカメやコンブなどの海藻が育たなくなり、海底はサンゴ藻という石灰藻ばかりという荒れた状態になります。ウニはサンゴ藻も食べますので生息することはできるのですが、こうなるとウニの身が少なくなり味も落ちて商品価値がなくなりますので、漁業関係者は恐れています。最上部層にウニの棘が大量に堆積したときは、ウニが大量発生して磯焼け状態になったのでしょうか。それとも水流の関係で単にウニの棘が大量に集積されただけなのでしょうか。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　お 知 ら せ　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

開館５０周年記念特別企画展
故熊野敏夫先生の愛した化石たち

開催中！

開催期間：　平成２６年１０月１１日（土）～　平成２７年１月３１日（土）
場　　所：　金生山化石館　２階展示室
休 館 日：　火曜日　（祝日の翌日　　年末年始：12/29～1/3　）

「金生山再発見」を刊行

開館５０周年を記念して、化石館のあゆみと金生山の化石や鉱物の紹介、また金生山にかかわる最新の話題を紹介した書物を刊行します。知っているようで知らなかった、金生山の魅力を再発見してください。

１１月３日発刊　　金生山化石館にて販売します。

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp